

## がん治療と妊よう性について

### 妊よう性（にんようせい）

とは、聞き慣れない言葉ですが、子供をつくる力、妊娠する力のことです。

女性ばかりでなく、男性にも当てはまる言葉です。

がんの治療に伴う化学療法や放射線治療では、不妊になるリスクを伴うことがあります。

しかしながら、がん治療の進歩により、長期生存の患者さんも増えてきており、患者さんが妊娠・出産を望まれることも少なくはありません。

生殖医療の進歩により、女性の妊よう性温存の方法も増えてきていますが、それぞれにメリット・デメリットがあります。

また、妊よう性への影響は、使われる薬や男女差、年齢、疾患によっても違ってきます。

がん患者さんの場合は、あくまでもがんの治療が優先となりますが、**子供が欲しいと考えている場合は、まず治療前に医師または看護師にそのことを伝えることが大切です。**

その上で、それぞれのケースに合った妊よう性の温存を考えていきます。

#### 女性の妊よう性温存の方法

受精卵凍結

卵子凍結

卵巣凍結

滋賀県下でも、滋賀がん・生殖医療ネットワーク

(OF-NET Shiga) : OncoFertility Net Shiga が

7月に立ち上がり、患者さんへの情報提供などを始めています。

「がんの治療と妊よう性について」のパンフレットなどもダウンロードできます

「骨髄移植で元気になった患者さんも障害を持つことがあります。私の場合は不妊でした。」と、25歳の時に慢性骨髄性白血病に罹られ、その後、日本初の骨髄バンクを作られた大谷貴子さんは語られています。

このような悩みを聞き、適切な情報をお伝えしていきたいと思っています

#### ~Cancer Month Kyoto 2015~

第53回日本癌治療学会学術集会在開催される2015年10月を「Cancer Month Kyoto 2015」と位置づけ、京都市内で大規模ながん啓発イベントが開催されます。

市民・患者参加のプログラム、市民公開講座では、「女性のがん治療と妊孕性温存」についての話題も。

事前申込みは9月25日まで。詳しくは下記ホームページをご覧ください。

<http://www2.convention.co.jp/cancermonth2015/program/index.html>

文責：がん化学療法認定看護師 川嶋 頼子